

第三十八章 クリーム大橋とスネーク・ライナー

特急ウク・ライナー鉄橋の側壁に接触して火花を放ちながら停車した。車体は傾き鉄橋も半壊した。強い風が吹けば平行する道路橋に落下するかもしれない。爽やかな青と黄色の車体から火の手が上がる。さすがのイリも絶体絶命のピンチ。決して独裁者にはならないようにと言う教訓かもしれない。

宇宙戦艦が特急イリ・ライナーの真上に現れる。艦艇から慎重に冷気を出しながら近づく。そして加藤と榊が乗った時空間移動装置が特急に横付けされる。しかし、その衝撃で車両が傾いて落下する。

*

一方ウクライナー軍の強力な反転攻勢を受けたクリーム半島ソシア軍ブラックシー艦隊司令部から逃亡を図る将校やソシア領となったクリーム州知事や高級官僚は我先に高級自動車でクリーム大橋に向かう。ガソリンを満タンにする時間がなかったので橋の途中でエンストする自動車が続出して渋滞する。

しかも隣には道路橋より十数メートル高い鉄道橋が架かっけていて特急ウク・ライナーが激し

く燃えている。鉄路はシールドされていないから火炎や黒煙がはばかることなく拡散する。高速で走るために車体は軽いアルミ製だ。内装は防火素材を使用しているが猛烈な火炎に対応できない。高温にさらされて座席や棚などが溶け始める。

道路橋では自動車を路肩に寄せて何とか通行できるようにする。走行可能な後続の自動車に手を振って相乗りを求めるが、ほとんどがそのまま走りすぎて対岸のソシア領を目指す。エンスト組の人々は啞然とする。立ち去ろうとする自動車に立ちほだかる者もいるが無視されるか、ひかれそうになる。満タン組の者がエンスト組の同僚だった人や家族を助けることはなかった。

*

ところが脱線した特急ウク・ライナーは後部車両から道路橋を渡ろうとする自動車に降り注ぐ。給油をしつかりしていた自動車に引火する。道路橋も鉄道橋も地獄絵図のような様相になる。その真上には宇宙戦艦が浮いている。

加藤と榊は時空間移動装置を使ってから特急イリ・ライナーへ乗り移ろうとしたが、うまくいわずに海に投げ出される。幸い二人は近くにいて無事だった。加藤が叫ぶ。

「大丈夫か！」

「イリは？」

海面に頭だけ出して会話するが首を横に振るだけだった。周りの状況も波に邪魔されて把握できない。そのとき時空間移動装置が近くに現れる。二人は必死に泳いで乗りこむと宇宙戦艦

に移動する。この大事件の中で宇宙戦艦の姿をさらけ出したことが大きな波紋を呼ぶ。

*

列車は意外と軽い。しかも特急列車の窓は固定されているから浸水を免れるのでしばらくの間は沈まない。特に先頭車両は火災が発生しなかつたので原形をとどめている。とは言っても橋から落ちて海にたたきつけられては中の人間が無事であるはずはない。乗っていたのは運転手と車掌とイリだけだった。

何とか宇宙戦艦に戻った加藤と榊は艦橋の巨大浮遊スクリーンに映る特急ウク・ライナーを見て呆然とする。宇宙戦艦の中央コンピュータに榊が命令する。

「あの列車を磁力レーザーで引き上げる！」

宇宙戦艦は海に漂う特急ウク・ライナーの先頭車両の真上に移動する。そのときクリーム半島の方から目映い光線を発しながら鉄道橋に近づく列車が近づいてくる。加藤が巨大浮遊スクリーンの隅の映像を拡大する。

「これはスネーク・ライナー」

特急スネーク・ライナー。この特急はレールがなくても走行できる不思議な列車だ。

「このまま進めばクリーム大橋に突入するぞ」

特急ウク・ライナーの脱線事故で線路は破損しているからスネーク・ライナーもそこで脱線することになる。加藤の心配など届くはずもない。スネーク・ライナーはクリーム大橋のかな

り手前で線路から離れて海に向かう。

「脱線したのか？」

加藤も榊も特急ウク・ライナーの救出を忘れてスネーク・ライナーに注目する。落下したスネーク・ライナーは一旦海面下に姿を消すがすぐ浮き上がって全身をくねらせながら進む。海上ですら走行可能な水陸両用列車だった。しかもヘビのように泳ぐから水しぶきを上げることなく速い。

一方見るも無惨な姿をさらけ出した特急ウク・ライナーが沈み出す。いつの間にかスネーク・ライナーが特急ウク・ライナーに近づく。するとくねらせていた姿勢を直線化する。そして何と最後尾の車両に特急ウク・ライナーの先頭車が連結される。まるで曳航するようにマリンポリン港を目指す。

この様子を宇宙戦艦で見ていた加藤や榊は自分の目を疑う。数々の修羅場をくぐり抜けてきた二人でも目の前の出来事が信じられなかった。宇宙戦艦は素早く急上昇して身を隠すが、すでに世界中にその映像が配信されてしまった。